



Title	チベットにおけるモンゴル政権の戸口調査と駅伝の導入
Author(s)	山本, 明志
Citation	内陸アジア言語の研究. 2025, 40, p. 223-241
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

チベットにおけるモンゴル政権の戸口調査と駅伝の導入

山本明志*

はじめに

チベットでは、モンゴル帝国と接触して以降、さまざまな社会的変化が生じるようになった。なかでも駅伝制度の導入は、チベットの人たちにとって具体的に目にできる変化であったと思われる。14世紀以降に成立するいくつかのチベット語典籍史料には、モンゴル政権によってチベットにもたらされた駅伝制度や駅舎の記事が見える。

モンゴル時代において、「駅伝」を意味する言葉は、多くの場合、モンゴル語 jam から派生した言葉が使われた。漢語では jam は「站」で写され、さらにモンゴル語の「～に従事する人」を意味する語尾 -ci がついた jamci 「站赤」の語が、「駅伝」を意味する語として利用された⁽¹⁾。

一方、チベット語史料においてモンゴル時代の駅伝に関する言葉は、-ci が付かない 'jam ~ 'jams といった形が見出される⁽²⁾。これは、施設としての「駅舎」を意味する場合と、制度としての「駅伝」を意味する場合の両方があるように思われる。また、'ja 'mo, 'ja' mo chen といった形も見える。史料の文脈上、前者は「駅舎」、後者は「大駅舎」の意味ととらえられる⁽³⁾。チベット語の 'jam ~ 'jams といった言葉をどのように理解するかについては、これを行政区画の名称とする議論がかつてはあったが [Das 1907: 97; Tucci 1949: 13]、その見解は否定され、現在は上述のように駅伝に関連づけて考えるようになっている [Laufer 1916: 294–296; Szerb 1980b: 270; 洛桑群覚・陳 1984: 67]。

では、チベットにはいつ、モンゴル政権によって駅伝制度が導入されたのであろうか。そもそ

* 大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部基幹教育機構教授 (YAMAMOTO Meishi. Professor, Institute of Liberal Arts and Proactive Learning, Osaka International University, Osaka International College)

(1) Mong. jam や、漢語表記の「站赤」の意味する所については、山本 2021c: 31–32 も参照。なお筆者が山本 2021b: 65 で、「モンゴル語で「道」を「jam」というが、これは駅伝制度や宿駅を指す言葉にもなり（後略）」と書いたことに対し、森安孝夫先生はすぐにメールで、因果関係がこれは逆で、jam はもともと「駅伝、駅舎」の意味であり、それがのちに「道」の意味になったのではないかと指摘され、Pelliot 1930 などをご教示くださった。まさしく、その通りであり、訂正したい。そして改めて、森安先生の学恩に感謝の意を表したい。

(2) モンゴル語の語尾 -ci は、チベット語典籍史料中では che と写されることが多い。例えば GBYT₁: 272 の glu'i dar ra kha che は「路のダルガチ (daryači)」[cf. GBYT 中文訳: 147]、GBYT₁: 289 の zu gur che は「傘持ち=スグルチ (sügürči)」[cf. 中村 1993: 80, n. 18] をそれぞれ写したものと考えられる。

(3) 'ja' mo は、'jam ~ 'jams に名詞語尾の mo が付いて、第一音節末尾の -m, -ms が消えたものと思われる。時代は下がるが、『西番訳語』宮室門の 'jam mo には、漢語で「館駅」の訳が付されている [北京図書館古籍珍本叢刊本; cf. 西田 1970: 90]。また 'ja' mo chen の形は、前注 2 で見たモンゴル語の語尾 -ci をチベット語で写す che のヴァリエントとして chen が付いているようにも見えるが、'ja' mo che chung の例は che chung=大小というチベット語の意味が現れているとも判断できる。それゆえ 'ja' mo chen は「大駅舎」を意味するものと考えられる。

も駅伝制度には、利用者が滞在・宿泊したり、駅馬などを準備しておく駅舎（駅）のような施設がまず必要である。さらに利用者のための食料や、駅馬そのもの、駅馬の飼葉などを、常時供給するしくみも必要である。チベットでは、在地の特定の氏族集団が、特定の駅舎の維持管理を担ったことが判明しており、例えば「チュミク（chu mig）ティコル（khri bskor／万戸・万人区）の3,003戸が、タルルン大駅（dar lung 'jams chen）を掌握する」〔GBYT₁: 302; GBT₂: 157; GBT 中文訳: 166〕といった表現がみられる。つまり、ある駅舎は、ティコルとして把握されるものをはじめとする、氏族集団の特定の戸数が維持管理の責任を負っていたのである。そうすると、チベットにおける駅伝制度の導入は、その維持管理のしくみを同時に策定していることが想定できるので、どの氏族集団が何戸保有しているのか、といった戸口調査が前提になる。

つまり、どこにどれほどの人戸があるのかという戸口調査がまず行われ、それに基づいて駅伝の維持管理のしくみが整えられた上で、駅伝制度がチベットに導入されたと考えられるのである。本稿は、モンゴル政権によっていつチベットに駅伝が導入されたのかを検討するものだが、その前提となる戸口調査がいつ行われたのか、という点を手がかりにすることにする。

1. モンケ期のチベットにおける戸口調査

まず、チベットにおいて初めて戸口調査が行われたのはモンケ=カアン（在位 1251–1259）の時代であることを主張したのは、セルブ（J. Szerb）であった〔Szerb 1980a〕。その根拠は、1252年2月にパクパ（*phags pa blo gros rgyal mtshan dpal bzang po*, 1235–1280）が書いた書簡における記述である。

パクパの著作は『サキヤ全書（*sa skya bka' 'bum*）』に収められ、1969年に東洋文庫から影印本が出版されたことで、広く研究に利用できるようになった。セルブの研究はその先駆的なものと言える⁽⁴⁾。

セルブが取り上げているのは、その内のNo. 306とNo. 316である⁽⁵⁾。本史料の日本語訳はこれまでで示されたことはなかったので、関係する箇所をここに示してみたい⁽⁶⁾。

【パクパ著作 No. 306】

聖者たるサキヤ=パンディタ（*sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po*, 1182–1251）が亡くなったあとにおいても、法主たるサキヤ=パンディタご自身の慈悲の力が、われら一切を平安にしているのである。王子モンゲドゥ⁽⁷⁾もおおいでになった。お心にかけてくださっ

(4) パクパの著作集は、東洋文庫影印本の第7巻に収録される。なお、福田洋一と石濱裕美子は『サキヤ全書』中のパクパの著作を整理し、執筆年月日・執筆地等を一覧にして示している〔福田・石濱 1986: 52–59〕。

(5) パクパの著作のナンバリングは、東洋文庫影印本の目次に示されているものに依る。

(6) Szerb 1980a: 291–292の英訳も参照した。なお、後述するが陳・史 1985: 4–5にも本史料の抄訳がある。

(7) 原文では *mong go ta*。セルブは *Möngketei* と転写し、注で *Mönggädu* とも転写されるコデンの子か、別人かは不明瞭である、との慎重な態度を示している〔Szerb 1980a: 291, 296–297, n. 29〕。この人物は王子（*rgyal bu*）と呼ばれていること、またこの後の1253年の出来事として、モンゲドゥがパクパと一緒にクビライに謁見しに行く記事が1346–1363年成立の『テプテル=マルポ（*deb ther dmar po*／紅史：以下DM）』にあることから〔DM: 48; DM 和訳 119; DM 中文訳 43; 中村 1997: 130–131〕、ここではオゴデイの次子コデ

ている⁽⁸⁾。モンケ=カン⁽⁹⁾が即位され、すべての方面に真実の聖旨⁽¹⁰⁾を発布された。「一切の国土も、たいへん安泰である。それぞれ僧侶に対しては、軍役、賦役、税、内の倉庫における財を求めるな。僧侶の住まいと、僧院には、使臣が投宿するところはない。駅馬を与える所はない。それぞれの宗教において、等しく天をまつれ。わたしは、一切において、請願をなした。すべての僧侶に対し、いかになすかの根本となる聖旨⁽¹¹⁾である。サキャパが掌握することにした、真実の聖旨を与える」⁽¹²⁾。すべての方面において、宣読された⁽¹³⁾。使臣たちが、チベットにおいて各地の人を数えることと、国土に対し永遠に課税するために、あなたのいくばくかの僧侶も遣わすと言って⁽¹⁴⁾、その事業のためにゲシェー=ドルジェドゥク (dge bshes rdo rje 'brug) と、ゲシェー=スンプ=プンユク (dge bshes sum bu dpon g.yog) たちが派遣されたのである。詳細は、彼らに書いた。そこには、耳に良い話、喜ばしくない話などさまざまであるが、恐れることはない。すべての方面において、良くなっている。あなたたちすべてが、大きい武器を身につけて、ラマのお仕えに勤めよ。水の女のネズミの年（壬子=1252年）2月5日の手紙。吉祥涼州の王宮の寺廟⁽¹⁵⁾で書いた。

1251年に、サキャ派の座主であり、パクパのオジでもあるサキャ=パンディタが涼州で亡くなり、その身边にいたパクパが、チベット本土に送った手紙がこれである。自身の近辺の事情について記し、「恐れることはない」と述べている所からすると、自身の本拠であるサキャ寺の僧たちに送ったものと考えて、大過あるまい。

続いてセルブが取り上げた、もう一件のパクパの手紙についても、関係箇所を訳出しておく⁽¹⁶⁾。

ンの子であるモンゲドゥと解してよいだろう。なお、DMでは mo go du の形で現れる。モンケの名もそうだが、モンゴル人の名も含め、外来語の音節末の-ng はチベット語文献の音写ではしばしば脱落するが、この現象については、セルブによる指摘がある [Szerb 1980b: 275, n. 64]。

- (8) サキャ=パンディタは、オイのパクバを伴って 1246 年にコデンの本拠地である涼州に到着し、1251年に同地で逝去する。その時 17 歳だったパクバは、コデン家のモンゲドゥの庇護下にあったことを言うのであろう。
- (9) 原文では mong go gan。モンケの名は、DM では mong gol gan の形式で現れる [DM: 30]。
- (10) 原文は 'ja' sa bzang po であり、「善い聖旨」が直訳である。しかしセルブはこの bzang po は「善い」ではなく、「真実の、本物の」という意味合いであると考証している [Szerb 1980b: 274, n. 60]。これに従う。
- (11) 原文では mgo lung。セルブは main precept（主たる命令状）と訳すが、mgo のニュアンスは更なる検討が必要かもしれない。mgo は「頭」が原義である。
- (12) このモンケの聖旨自体、極めて注目すべきものであるが、用いられている用語や、その形式面等についてはここでは踏み込まない。
- (13) 文書化されたモンゴル皇帝の聖旨は、送達地において読み上げられること（宣読・開読）を前提としていた [中村・松川 1993: 14; 船田 2005]。
- (14) この部分も、モンケの発言とセルブは解釈している [Szerb 1980a: 298, n. 47]。なお、「あなたのいくばくかの僧侶 (khyed kyi bande zhig)」の「あなた」は、文脈上パクバを指すようにもみえるが、パクバがこの時点でモンケと接触を持っていた形跡はない。それゆえ、モンケが他の僧侶に言っている可能性の方が高い。
- (15) 原文は dpal ling chu rtsir khab kyi gtsug lag khang。dpal=吉祥、ling chu=涼州は問題ないが、rtsir についてはよくわからない。rtsir khab の khab は王宮の意味であると思われる。セルブは特段の説明は加えず、“glorious Liang-chou, in the temple of the residence” と Szerb 1980a: 292 では訳出している。また、Szerb 1980b: 273, n. 53 で、rtsir について rtser というヴァリエントを紹介しているが、意味は確定していない。
- (16) Szerb 1980a: 292 には本史料への言及はあるが、訳出はされていない。

【パクパ著作 No. 316】

最近のできごととして、いま（モンケ）皇帝⁽¹⁷⁾がお心かけられて、「僧侶とボンポ⁽¹⁸⁾たちなどは、天をまつることなどのために、軍役はないようにせよ。その筆頭の管理者と、すべての僧侶はサキヤパが掌握すること」ということを述べられた聖旨⁽¹⁹⁾が發布された。その聖旨が発されて、人々を数えることと、ロブン（slob dpon／阿闍梨）をお迎えすることのために⁽²⁰⁾、ドルジェドゥク（rdo rje 'brug）が派遣されたのである。

この No. 316 の末尾には、No. 306 と同様に執筆年月日と執筆場所が明示されており、「水の女のネズミの年（＝壬子＝1252 年）2 月 3 日に涼州の王宮の寺廟で書いた」とある。No. 306 が 2 月 5 日に書かれているので、執筆日は近接している。なお宛先は、ロブン＝ソナム＝センゲ（slob dpon bsod nams seng ge）⁽²¹⁾とされている。

セルブは No. 306 に「使臣たちが、チベットにおいて各地の人数を数えること」、No. 316 に「聖旨が発されて、人々をかぞえること」と記されていることから、1251 年 6 月のモンケの即位後、チベットに使者が派遣され、戸口調査が実施されたことをこれから読み取った [Szerb 1980a: 293]。上で訳出したパクパの手紙の中には、コデン家のモンゲドゥクが言及されたり、モンケの聖旨の抄訳と思われる部分があったりと、興味深い点は多くあるのだが⁽²²⁾、ここでは、チベットにおける戸口調査に注目したい。

ワイリー（T. V. Wylie）は最初のチベットにおける戸口調査は 1268 年に実施され、「13 ティコル（khri skor／万户・万人区）」⁽²³⁾も 1268 年に設定されたとしているが [Wylie 1977: 125]、セルブはこれに対し、上で示した史料の通り、モンケ時代の 1251～1252 年にチベットの戸口調査は計画されていたことは明らかであるとする。そして、なぜモンケ期にチベットで戸口調査が行われたと言えば、それは、1253 年の対雲南戦の布石であったと想定している [Szerb 1980a: 293]。

Szerb 1980a は、1979 年にオクスフォードで行われた国際チベット学セミナーのプロシーディングスの論文であり、比較的短いものであった。その内容を踏まえた、より詳細な検討は、Szerb

(17) 原文は単に rgyal po であるが、時代背景・文脈からモンケのことと考えられる。

(18) 原文は bon po. ボン教の僧侶を指すだろうが、唐突な印象もある。

(19) これが、先に挙げた No. 306 に見えるモンケの聖旨のダイジェストであると、セルブは指摘している [Szerb 1980a: 292]。

(20) 「ロブン（slob dpon＝阿闍梨）をお迎えする」とは、高僧を招請することを意味するだろう。セルブはこの点については特に何も言っていないが、これは、例えばモンケなどがチベット在住の高僧を近くに呼び寄せることを述べていると推測される。モンケに招請されたチベット仏教僧侶としては、カルマ派のカルマ＝パクシがいる [山本 2017: 121–126]。モンゴル皇族は、チベットにおける自身の権益地から、独占的に僧侶を招請する権利を持っていたと考えられるが [山本 2021b: 57]、この記述も、そのようなモンゴル皇族のチベットへのかかわりの一端を示していると考えられる。

(21) Szerb 1980a: 292, 298, n. 55, 299, n. 57 参照。この人物の詳細は不明だが、セルブはサキヤ＝パンディタとの書簡のやり取りがそれ以前にあった人物であろうと推測している。

(22) 他のチベットの諸集団よりも、サキヤ派の優越性がモンケによって認められているようにみえる部分は非常に興味深いが、慎重に検討する必要があるだろう。

(23) チベットの「13 万户」については、山本 2021a: 18–19 参照。

1980b において展開されている。この論文でセルブは、チベットにおけるモンケ時代の戸口調査がパクパの手紙で言及されていることを踏まえ、戸口調査がチベットのモンゴル政権による行政的統合への初期の一步として解釈できるとする⁽²⁴⁾。そして、ダス (S. C. Das) によって提示されていた『ギャプ=イクツァン (*rgya bod yig tshang*／漢蔵史集：以下 GBYT)』⁽²⁵⁾の抄訳を利用し、Tāmen という名の将軍がチベットに派遣された結果、チベットに駅伝 (ジャム) のシステムが導入され、13 ティコルの分割が実施されたが、それらはモンケ時代のことと結論づけた [Szerb 1980b: 279–280]。

ただし、セルブはダスによる GBYT の抄訳に対して、疑義も示している。ダスは GBYT に依っ

(24) 陳・史 1985: 6, n. 6 は Szerb 1980a を引いて、セルブは、モンケによる戸口調査がチベットにおいても実施されたことにすでに指摘しているが、雲南に対する侵攻を保証するためという一側面しか強調せず、中原における戸口調査や分封との関連に注意していない、と批判する。しかし、中原における戸口調査との関連については、Szerb 1980b で先駆的に取り上げられている。セルブは、戸口調査というのは征服地をモンゴル帝国の行政組織に編入していくための足掛かりであるとし、1252 年のモンケによる華北における戸口調査にも言及している [Szerb 1980b: 266, n. 11]。ただし、漢文史料の『元史』からは、チベットにおける同時期の戸口調査の存在は確定できないとも指摘している。

(25) 佐藤 1986: i–ii に依ると、1960 年代の日本においては、GBYT を含め、チベット文献がほとんどなかったが、稲葉正就と北村甫によって、シッキムのデンサバ氏所蔵本の写真が将来されたという。現在東洋文庫に所蔵されている GBYT は、このデンサバ本の写真版である [cf. Yamaguchi 1970: 172]。GBYT のテキストについて、孫鵬浩は、東洋文庫に写真版が将来された所謂デンサバ本をブータン版と呼び、1985 年に中華人民共和国の四川民族出版社から出版された活字本を、ブータン版の排印本と称する。そして『藏族史記集成』巻 9 (青海民族出版社、2010 年) に、デプン寺所蔵の GBYT の写本が収録されているという [孫 2025: 14, n. 2]。デンサバ氏所蔵本は、本来ブータンにあったものであるということは、筆者も耳にしたことがあるので、この命名は妥当なのであろう。ただし、その根拠については、何らかの文献に説明があるのかもしれないが、未確認である。また、『藏族史記集成』についても、未見である。

さて、GBYT の排印本とは別のテキストとして、百慈蔵文古籍研究室：編輯整理『先哲遺書 (二十八)：雪域歷史名著精選』中国蔵学出版社、2007 として活字出版されているものが、近年注目されている。伴真一郎はそのタイトルが *rgyal rabs mang po'i legs bshad rnam gangs yid 'dzin nor bu'i phreng ba* とあることから『各王朝善説』という題名をつけ、著者が GBYT と同じペンジョル=サンポ (*dpal 'byor bzang po*) と推定されることなどから、これを GBYT の異本と言う [牛根ほか 2021: 44–46, n. 19]。これはデプン寺所蔵本であり、この点からすると『藏族史記集成』本と同じものと推測される。このテキストについては、孫鵬浩も参照していることを述べているが、『藏族史記集成』本との関係については特に説明していない [孫 2025: 22, n. 4]。本稿では、孫がブータン版の排印本と呼ぶ活字テキストを GBYT₁、伴が『各王朝善説』と呼ぶ活字テキストを GBYT₂ とし、GBYT₁ を底本として、適宜 GBYT₂ を参照することにする。

さらに孫鵬浩は、先行研究をまとめつつ、GBYT の著者であるペンジョル=サンポについても考察している。15 世紀の人であるタクツァン (*stag tshang*) 翻訳師シェーラプ=リンチェン (*shes rab rin chen*) の自伝に依ると、その祖父であるソナム=ギェルポ (*bsod nams rgyal po*) は、サキヤ派座主一族のクン氏のメンバーである、白蘭王の称号を得たタクパ=ギェルツェン (*stag pa rgyal mtshan*) の次子ナムセ=ギェルツェン (*rnam sras rgyal mtshan*) の官府で文書官を務めていたという。そして叔父のペンジョル=サンポも文書官であったという。当該自伝の記述内容から、このペンジョル=サンポこそ、GBYT の著者であると考えられ、彼は白蘭王の子孫のもとで文書官をしていた人物であったと孫は結論づけている [孫 2025: 25–26]。なおこの論文で、文書官は *yig mkhan* や *yig dpon* といった言葉の訳語として用いられている。いずれにしても、GBYT の性格を考える上で、重要な見解であると考えられる。GBYT がサキヤ派との関係が深い人物の手によるものであることは推測されてきたが、これにより、ペンジョル=サンポが、サキヤ派に関わる一次史料にアクセスしやすい立場であったことが想定できるようになった。

て、コデンの死後、クビライが中国の皇帝となり、カンバリクに住まいし、そのすぐあと、クビライが Tāmen をチベットに派遣した、としている。そうすると Tāmen のチベットへの派遣はクビライ即位年の 1260 年以降のこととなり、すぐ後の文でクビライによる 1253 年の雲南遠征が言及されているのと、時代の齟齬があるからである [Szerb 1980b: 269, n. 27, 272]。セルブは GBYT の現物を見ることはできておらず、ダスの訳が正確なのかどうかの検証はできなかった。それゆえ、クビライが Tāmen をチベットに派遣したのは、1260 年に即位した時ではなく、1251 年のモンケの即位後、クビライが「北部 (Northern Part) の支配者」になった時である、とセルブは解釈した [Szerb 1980b: 272]。ただ、「北部の支配者」についてはそれ以上の説明はないため、明快さを欠く議論となっている。

しかしセルブの研究で重要なのは、モンケ期のチベットにおける戸口調査実施の痕跡を、パクパの手紙から見出し、それを GBYT の記事と関連づけ、戸口調査の結果、駅伝の設置がモンケ期に実施されたと推測した事である [Szerb 1980b: 280]。また、モンケ期のチベットにおける戸口調査を、やはりモンケ時代の北中国において実施された「壬子年の戸口調査」と連動したものではないか、と考えた点も慧眼である [Szerb 1980b: 266, n. 11]。ただし、GBYT はダスの抄訳しか利用できない状況にあり、Tāmen の派遣の時期をどう考えるか、といった問題などは残されることになった。

モンケ期のチベットにおける戸口調査について、次に取り上げたのは陳慶英と史為民である [陳・史 1985]。彼らもセルブと同様、パクパの手紙を根拠に、チベットにおいて戸口調査が行われたのはモンケの時代であると結論づけた。ただし、彼らが根拠として提示しているパクパの手紙の中文訳については、注意が必要である。彼らの研究で、パクパの手紙としてチベット語テキストから中国語訳しているように見えるものは、まず冒頭部分は 1629 年成立の『サキヤ=ドゥンラプ (*sa skya gdung rabs chen mo*/サキヤ世系史)』の中文訳である。また、途中のモンケの聖旨の部分はイリンチン (Irinčin/亦隣真) が研究した「元氏開化寺聖旨碑」のフレーズを利用して中文訳しており、もとのパクパの手紙にない文言が付加されている [亦隣真 1982: 174; 陳・史 1985: 4-5]。つまり、パクパの手紙であるとしつつ、実際はそのものを中文訳しているわけではないのである。

この研究では、チベットにおける戸口調査はモンケ期の 1252 年初めに始まり、これは中原やルーシでの戸口調査とだいたい同じ時期であり、モンゴル帝国全土で統一的に行われたものである、と指摘されている。その上で、チベットの状況は他とは異なり、戸口調査時はパクパが派遣した仏教僧侶が参加しており、彼らは各宗派や世俗の領主との連絡に活用され、混乱が引き起こされないようにされた、とも述べている [陳・史 1985: 5]。これは【パクパ著作 No. 306】にみえる、「ゲシェー=ドルジェドゥクと、ゲシェー=スンプ=プンユク」、【パクパ著作 No. 316】にみえる「ドルジェドゥク」の派遣のことを言うのだろうが、パクパが彼らを派遣したとするのは、誤りであろう。史料の文脈上、パクパがこの戸口調査の事業に主体的に関わっているとは読み取れない。派遣者はモンケであると解するのが適当である。ただ、これらの人名がチベット語であるこ

とと、「ゲェシェー (dge bshes／善智識)」と呼ばれているので彼らが僧侶であることは確実である。チベット仏教僧が、モンケのもとから戸口調査のためにチベットに派遣されていたという事実は、この事業にモンケの近辺にいるチベット仏教僧が関わっていたことを想起させる。

また、この論文は戸口調査の結果、チベットにおけるトルイ家による分地分民が行われたと考えたが〔陳・史 1985: 5–6〕、駅伝の設置についての検討はなされていない⁽²⁶⁾。

さて、以上をふまえ、モンケ時代の戸口調査について、より広い視点から検討を加えたのは川本正知である。川本はモンケ期の戸口調査がその領域内で統一的に実施されたことを詳細に提示し、チベットについても、セルブ、陳・史の研究をひきつつ、次のようにまとめた。すなわち、1251年にモンケが即位すると、軍をチベットに送って同地を再征服し⁽²⁷⁾、Tāmen という名の使者を派遣して、本格的な戸口調査を行った。そして、中央チベットを多くのティコルに分割し、Tāmen はサキヤ派の本拠地であるサキヤと中国辺境とのあいだに 27 のヤム (駅) を設け、設定されたティコルをヤム一つ一つに割り当てた、と〔川本 2000: 52–54; 川本 2013: 203–211〕⁽²⁸⁾。

川本の研究は、モンゴル帝国の施策を、より広い観点から扱っている点で重要である。ただ、セルブが留保していた Tāmen の派遣の時期の問題については再検討されておらず、モンケ期のこととしている。しかし、Tāmen の派遣の問題については、GBYT のテキストそのものの文脈から、改めて考える必要がある。

2. GBYT に見えるクビライ期のジャムチの設置記事と戸口調査

前述の通り、セルブの研究の時点では、GBYT のテキストの現物は一般的に見ることはできず、特に欧米の研究者はダスの抄訳を利用するしかなかった。その状況が変わるのが 1980 年代半ばである。GBYT のチベット語テキストの活字版が 1985 年に中国から出版され、ひろく利用できるようになったのである。問題の、Tāmen の派遣に関わる部分は以下のとおりである〔GBYT₁: 273–274; GBYT₂: 139; GBYT 中文訳: 149; cf. 山本 2021a: 19〕。

【GBYT①】

モンゴルのセチェン皇帝 (se chen rgyal po／クビライ) の自身の聖旨 (lung) で、大臣⁽²⁹⁾

(26) 戸口調査が行政機構の設置、駐軍、駅伝の設置の基礎となる、という点是指摘している〔陳・史 1985: 6〕。いずれにしても、この論文が Szerb 1980b を参照していないのは惜しまれる点である。

(27) このモンケ時代のチベットに対する遠征については、ひとまず Szerb 1985b: 266–267 を参照。これは『元史』巻 3、憲宗元年 6 月の条に見える「和里解を以て土蕃等処蒙古漢軍を統べしめ、皆な前に仍りて征進せしめ (後略)」〔中華書局点校本: 45〕をどう解釈するか、という問題である。チベット語史料には対応するような、モンゴル軍の侵入記事はなく、川本の言う「再征服」の意味するところは慎重に再検討する必要があるが、本稿ではこれ以上は踏み込まない。

(28) モンケ時代におけるモンゴル帝国全体の戸口調査については、Allsen 1987: 118–143 も参照すべきである。チベットに関しては Szerb 1980a と Petech 1980 が引用されている。

(29) 原語は mi chen であり、直訳すれば「大きい人」である。孫鵬浩は、この語が政府の官員の尊称であると説明しつつ、「大人」と訳すことを提案している〔孫 2025: 9, n. 1〕。ここでは、政府の官職に就いている側面を考慮し、陳慶英が採用している「大臣」の訳語を採る〔GBYT 中文訳: 149〕。

das sman に命令が下された。「das sman, お前は聞け. かのチベットには, 凶暴な人がいるのだろう. むかし, チベット王 (bod rgyal po) がいた時, 唐の太宗皇帝 (thang tha'i rdzung rgyal po) の時代に, 五臺山にチベットの大軍が来た. (中略) かの, ラマ=パクパのオジ・オイが, 別のチベット地方の王ならば, かの智慧は大きいので, 我々は抗わない. いま, すべて, 我々の下に入ったのである. das sman よ, お前は行いが善いので, 一度サキヤに行け. 全チベットは, セチェン=クビライ (go pe la < Mong. Qubilai) の下に入って, 大臣 das sman もまた, サキヤに至ったのである, という.

この箇所を見ると, まずダスが Tāmen と表記していた人物は, GBYT においては das sman と表記されていることがわかる. ダスがどうしてここから Tāmen という人名を再構成したかは不明だが, 陳慶英は GBYT の中文訳を 1986 年に出した際, この人名を「答失蛮」とした. 答失蛮とは, ペルシア語 dānišmand を借用したモンゴル語ダシュマン (dašman) の漢字表記である. この語は, ペルシア語の原義「ムスリム識者」をさす一般名詞としてだけでなく, 人名としても頻用され, 答失蛮という名の人物も漢語史料に頻見する⁽³⁰⁾. チベット語 das sman を dašman > 答失蛮に比定する陳慶英の提案は的を射たものであり, 従うべきである. それゆえ, ダスの提案する Tāmen は, 採る必要はない. 本稿もここからは, この人物をダシュマンと呼ぶことにする.

次に, ダシュマンのチベットへの派遣について, 改めて見てみよう. 文脈上, 上に示した【GBYT①】にモンケの姿は全く見えず, クビライは皇帝 (rgyal po) と称され, その命令も聖旨 (lung) という言葉が用いられている. これらのことからすると, ダスの抄訳からも判断できる通り, ダシュマンのチベットへの派遣は, クビライがカアンに即位した 1260 年以降のこととして GBYT には描かれている, と判断するのが妥当である.

【GBYT①】の後, GBYT にはダシュマンがパクパの本拠地であるチベットのサキヤからクビライのもとに戻り, 状況報告をする場面がある. その報告に対してクビライは, 「サキヤ以東に, 大小の駅伝 ('ja' mo) ⁽³¹⁾に適するように, 土地が平坦かどうか, 駅伝を管理する民戸が富裕かどうか, 中国 (rgya) の駅伝 ('jam) を模範にして, 駅伝をつくれ. ラマ=パクパがチベットに行かれるとき, おいでになる道が快適である必要がある」とダシュマンに申し伝えている [GBYT₁: 274-275; GBYT₂: 140; 山本 2009: 4]. そして, ダシュマンは再度チベットに派遣され, 中国とチベットとの境からサキヤまでに 27 の駅伝を建設したことが述べられている [GBYT₁: 275; GBYT₂: 140; 山本 2009: 4-5].

GBYT の活字テキストが世に出て以降, 中国の研究者を中心に, これらの GBYT の記事を根拠として, モンゴル時代のチベットにおける駅伝に関するいくつかの研究が提出されている⁽³²⁾. ま

⁽³⁰⁾ 『元史』にみえる答失蛮という名の人物については, 楊志玖の考証を参照のこと [楊 1983].

⁽³¹⁾ 'jam (< Mong. jam) 「駅」に, 名詞語尾の mo が接尾し, 本来の 'jam の m が脱落した形と考えた. この語は, テキストの文脈から判断して, 駅の施設自体を指すと考えられ, 「駅伝」と訳出した. また, ここに見えるように, チベットの駅伝 ('ja' mo) には大小 (che chung) の区別があったと考えられる.

⁽³²⁾ 本文で言及する以外の, チベットの駅伝に関する研究として, 蔡 1984 がある. この研究は漢語史料のみ

ず、洛桑群覚・陳慶英は、チベットにおける駅伝の設置は、1260～1265年のパクパとその弟チャクナ＝ドルジェのチベット帰還時であるとした〔洛桑群覚・陳 1984: 67〕。そして、この論文の筆者の一人である陳慶英は、翌年祝啓源とともに再度 GBYT を全面的に用いたチベットの駅伝についての研究を発表するが、論点は洛桑群覚・陳 1984 とおおよそ同じである〔祝・陳 1985〕⁽³³⁾。龐 1999 はチベットの駅伝ルートについての専論であるが、ルート比定の根拠がほとんど挙げられていない問題がある⁽³⁴⁾。また駅伝の設置の経緯については、1244年にサキャ＝パンディタが涼州のコデンのもとに赴いた際、コデンが戸口調査と駅設置の命令を出したが、実質的には1260年のクビライの即位後にそれらが実施されたと考えている〔龐 1999: 49〕。しかし、コデンによる戸口調査と駅伝設置の命令から、その実施まで16年以上もかかっているのは、時間がかかりすぎている。またコデンの命令の存在についても根拠が十分ではなく、この見解には従いがたい。

GBYT が広く利用できるようになって以来、モンゴル政府によるチベットにおける戸口調査・駅伝の設置の問題は、GBYT を根本史料として論じられる傾向がある。欧米の研究としては、ペテック (L. Petech) のものがある。ペテックは東洋文庫に将来された GBYT のコピーを榎一雄から提供され、チベットにおける戸口調査について検討した。そして、1268年にチベットで戸口調査が行われ、ティコルごとに駅維持業務が割り当てられたと結論づけた〔Petech 1980〕。なお、GBYT には1287年の戸口調査の記事もあるが〔GBYT₁: 298; GBYT₂: 156〕、ペテックはこれを1268年の調査の修正であり、実際には現地調査は行われていないと考えた〔Petech 1980: 235〕⁽³⁵⁾。

なお、パクパは1264年はじめにクビライのもとを出発し、1265年3月までにサキャに到着しているの、筆者はかつて、「パクパのサキャへの帰還にあわせてチベットにジャムチが建設された」、「パクパがサキャに到着している1265年3月までに、(中国とチベットとの境にあたる) 臨洮⁽³⁶⁾付近からサキャまでのジャムチルートがひとまず完成していた」とまとめた〔山本 2009: 5〕。

からチベットの駅伝について検討を加えるものであるが、史料の列挙にとどまっており、チベットの駅伝の具体像を描き出すには至っていない。

(33) なお、この論文は、チベットの駅伝に関するまとまった記述は GBYT 中に二つあることを指摘している点が重要である。一つは、先に述べたように、1265年のパクパのサキャへの帰還に先立ってダシュマンがチベットに派遣され、27の駅が設置された、という部分である。もう一つは、1268年にアコン (a kon) とミリン (mi gling) がモンゴル朝廷からチベットに派遣されて戸口調査を行い、駅伝の管理方法を確立した、と述べる部分である〔祝・陳 1985: 28, 34〕。そして、両箇所列举される駅伝の名称には、部分的に一致しない問題がある〔祝・陳 1985: 34〕。これらは、時期の異なる二つの駅伝名リストであることを、山本 2009 では論じている〔山本 2009: 5-10〕。

(34) チベットの駅伝の所在地については、祝・陳 1985: 31-34 以来、多くの先行研究が位置比定を試みている。しかしその方法は、GBYT 中に見える駅伝名と類似する現在の地名を探し出す、というものがほとんどである。時間はかかるが、地道に諸史料中から地名を収集し、地名変化も念頭におきつつ、分析を積み重ねることが必要であろう。

(35) ペテックはその後、Petech 1983: 200, n. 78; Petech 1990: 62 で、1545-1564年成立の『賢者喜宴 (mkhas pa'i dga' ston)』の記述に基づき、チベットにおける駅伝の設置は1269年であるとした。しかし、おそらく『賢者喜宴』は GBYT の記事に基づいて記されていると思われ、成立年代がより新しい『賢者喜宴』の記述の方が、GBYT より信憑性が高いとは考えがたく、従えない。

(36) 中国・チベット間の交通路上の臨洮の重要性については、山本 2010 で指摘している。また中村 2010: 50-

しかしこの論考は、前述のセルブの研究について検討を加えていなかった問題がある。また、一連の中国人研究者の研究も、セルブの研究を十分に踏まえているとは言い難い。モンゴルによるチベットでの戸口調査はいつ実施されたのか、そしてそれに基づく駅伝の設置はいつ行われたのか、という問題については、改めて考えねばならない。

3. ダシュマンの記事をめぐる

GBYT が広く利用できるようになり、我々はモンゴル時代のチベットに関する情報をより多く得られるようになった。一方、GBYT は、元朝最後の皇帝であるトゴン＝テムルが大都を放棄してモンゴル高原に退いた 1368 年から半世紀以上を経過した 1434 年に成立している。GBYT はモンゴル時代の同時代史料とは言えず、慎重な取り扱いが必要である⁽³⁷⁾。

セルブはダスの抄訳に依りつつ、GBYT 中のダシュマンのチベット派遣の記事を検討した際、それをパクパの手紙に見えるモンケ期のチベットにおける戸口調査と関連づけるため、解釈に苦心していた。しかし、GBYT の現物を検討できるいま、GBYT のテキストから、ダシュマンのチベットへの派遣時期を、モンケ治世期と解釈するのは、難しい。

では、GBYT が述べる、クビライによるダシュマンのチベット派遣の記事や、それに続く駅伝設置の記事は、どこまで「史実」として扱って良いのか、という観点から、改めて考えてみてはどうだろうか。というのも、GBYT の当該記事には、書かれている内容をそのまま受け入れることをためらう、二つの疑わしい点があるからである。

まず、ダシュマンという人物、その人についてである。張雲は GBYT に見えるダシュマンを、姚燧『牧庵集』巻 13 所収「皇元高昌忠惠王神道碑銘并序」の被顕彰者（達実克／達実密）であり、『元史』巻 134 也先不花伝にも名が見える答失蛮に比定した [張雲 1993: 281–283]。その上で GBYT の記述に基づき、チベットにおける駅伝設置の年を 1264 年と考えた [張雲 1993: 284–285]⁽³⁸⁾。

この神道碑の記述を見てみると、至元 25 (1288) 年と至元 27 (1290) 年の間の記事として、「制を改むるに及び、置きて宣政院と為し、^{ダシュマン}王を以て使と為す」という記事がある。張雲はこれを至元 25 (1288) 年に、仏教とチベットに関する業務を統括する総制院が宣政院に改められ、サンガ（桑哥）がそのトップである院使となったことと関連づけ⁽³⁹⁾、この時にダシュマンも宣政院使になったとしたのである⁽⁴⁰⁾。

55 は、高麗の史料も用い、臨洮の持つ意味等を詳しく分析している。

(37) この点については、山本 2021a: 3, n. 4 も参照。

(38) なお、ダシュマンについては、楊 1983 の詳細な考証がある。また、松井 2020: 73 と同 n. 39 に挙げられる研究も参照。

(39) 『元史』巻 15、世祖本紀 12、至元 25 (1288) 年 11 月甲辰の条「釈教総制院を改め宣政院と為し、秩従一品、印は三台を用い、尚書右丞桑哥を以て宣政使を兼ねしむ」[中華書局点校本: 317]。なお、『元史』巻 87、百官志 3、宣政院によれば、院使は二員とされている [中華書局点校本: 2193]。

(40) なお宣政院使ダシュマンの名は、碑文史料にも見いだせる。藤原崇人が引用する王思廉「元順徳府大開元寺弘慈博化大士万安恩公碑」[大徳 11 (1307) 年刻；民国 22 (1933) 年鉛印本『達県志』（『新修方志叢刊・四川方志 60』台湾学生書局、1971）] には、「宣政院使答失蛮」が言及されており、クビライの次のテ

確かにこのダシュマンは、宣政院使となったことから、チベットに関わった人物であるのは間違いない。しかし神道碑に依る限り、彼の院使就任はパクパの死（1280年）の後である。彼はもともとクビライのケシク出身で、オルトク総管府や戸部などに関わる財務官僚であったようで、宣政院使になる前に、チベットや仏教に関わるポストに就いていた形跡はない。さらに、ダシュマンは元貞元（1295）年にカイドウ軍がチベットに侵入した際、軍を率いてチベットに至ったことが知られている〔張暁非 2023: 74-76〕。1288年以降にチベットと関わるようになったダシュマンが、1264～1265年のパクパの帰還に合わせて駅伝を敷設する、という GBYT の記事は、神道碑に見えるダシュマンの経歴から考えるとわかには受け入れ難い。

一方で、GBYT は一連の駅伝設置記事の後で、ダシュマンは「宣政院（son bying dben）の根本の長官に任ぜられた」⁽⁴¹⁾と述べている。これまでの研究では、チベットの駅伝設置はパクパのサキャへの帰還と関連付けて考えられていたため⁽⁴²⁾、パクパの生存中に「宣政院」の名は登場しないことから、ここにいう「宣政院」は誤りで、改称される前の「総制院」とするべきである、と理解されてきた〔GBYT 中文訳: 150, n. 2 など〕。しかし、ダシュマンの神道碑の記述からすれば、ここはむしろ「総制院使ダシュマン」を想定するよりも、漢語・チベット語両方の史料に確認される「宣政院使ダシュマン」の存在を重視するべきだろう。

つまり GBYT は、チベットに関わる宣政院の長官であるダシュマンの名前が、チベットでよく知られていることから、チベットにおける駅伝設置事業の責任者とする話を創作したのではないかと疑われるのである⁽⁴³⁾。

ムルの時代も、ダシュマンが宣政院のトップの座にあったことがうかがえる〔藤原 2005: 36-37〕。なお、『元史』において、この宣政院使ダシュマンの名が最も遅く見えるのは、『元史』巻 19、成宗本紀 2、元貞 2（1296）年 3 月壬申の条〔中華書局点校本: 403〕である。なおダシュマンは大徳 8（1304）年 7 月 25 日に 57 歳で死去していることが、彼の神道碑より判明するので、その生年は 1248 年ということになる〔楊 1983: 215〕。

(41) son bying dben gyi khirms dar / rtsa ba'i dpon chen la bskos / 〔GBYT₁: 276; GBYT₂: 141〕。各種チベット語典籍では、宣政院を son bying dben などと音写した形式が確認されるが、一方「総制院」がチベット語で音写された例は知られていない。その理由をここで明らかにすることはできないが、問題の一つとして取り上げておく。

(42) 本稿 pp. 230-231 参照。←

(43) なお、張雲はダシュマンが 1264 年に総制院使となつて、チベットにおける駅伝設置の責任者を務めたと考えている。1264 年時点でダシュマンは 17 歳であり、張雲は、「若くて才能がある、というべきだ」と述べるが〔張雲 1993: 285〕、職掌の重さに比して若すぎる印象があり、説得的ではない。1288 年時点ならば 41 歳であり、従一品の宣政院使としても違和感はない。

さて、1264 年のパクパのチベットへの帰還は、どのような背景があつたのであろうか。パクパはその後、1268 年に改めてクビライのもとに赴き、1270 年には帝師に任命されるが、1276 年にサキャに帰還している。1276 年のパクパのサキャへの帰還については、中村淳による考証があるが、当時、中央チベットでは、サキャの行政長官であるブンチェン職にあったクンガ＝サンボの乱がおこり、さらに西チベットからはクビライに敵対するシリギの勢力が侵入していたことが推測されている〔中村 1997: 124-129〕。つまり、混乱するチベット情勢を鎮めるために、モンゴル軍とともにパクパがサキャに帰還したのである。パクパのチベットへの帰還は、政治的な背景が想定できるのであり、1264 年のパクパのサキャへの帰還も、アリク＝ブケの乱などの影響も念頭に置き、慎重に考える必要があるだろう。ダシュマンがもし、

GBYT に見える、パクパの帰還に合わせた、チベットの駅伝設置記事が疑わしい二つ目の理由は、この記事の中で、クビライによる駅伝設置の聖旨がダシュマンによって読み上げられた三つの地点に関連するものである。GBYT によると、ダシュマンは中国とチベットとの境からサキヤまでに 27 の駅伝を建設する際、ドメー (mdo smad) のデンティク水晶仏殿 (dan tig shel gyi lha khang), ドトゥー (mdo stod) のツォムドサムドゥプ寺 (gtso mdo bsam 'grub), サキヤの三か所で民衆を集め、駅伝設置についてのクビライの聖旨を読み上げた、という [GBYT₁: 275; GBYT₂: 140; GBYT 中文訳: 150]。山本 2009: 4 で考証したように、この三箇所は、吐蕃等処宣慰使司都元帥府、土蕃等路宣慰使司都元帥府、烏思藏宣慰使司都元帥府の治所と考えられる。これら三つの宣慰使司都元帥府は、モンゴル政権のチベット行政を担当する宣政院の主たる出先機関であるから、チベット内の駅伝ルートが、これらをつなぐのは必然的ともいえる。

では、チベット三宣慰使司都元帥府はいつできたのであろうか。もっとも早い宣慰使設置の例は、ウイグル人の葉仙鼐が土蕃宣慰使に就任した至元年間初め (1264 年～) であるが⁽⁴⁴⁾、三つの宣慰使司が揃うのは、泰定 2 (1325) 年まで下ると考えられている⁽⁴⁵⁾。チベットにおける駅伝路が、三つの宣慰使司の治所を繋ぐものと知った上で、GBYT がこの三か所をわざわざ取り上げ、ダシュマンによる駅伝設置の聖旨の宣読地点としているならば、この話は三つの宣慰使司が出現した後に成立したものと考えるのが妥当ではないだろうか⁽⁴⁶⁾。

以上のように、GBYT に見える、「パクパのサキヤ帰還に合わせて、ダシュマンがチベットに駅伝を設置した」という記事は、史実として疑わしい側面がある。なによりパクパの手紙からは、モンケ時代にチベットにおける戸口調査が実施されたことがうかがえる。そして、その戸口調査に基づいて駅伝の維持管理負担が決定される、という流れが考えられるのであるから、GBYT の

本当に 1264 年のパクパの帰還に関わっていたとするならば、それはいかなる立場で、どのような役割を果たしていたものなのか、改めて考えてみたい課題である。現段階では、ダシュマンを「チベットにおける駅伝の設置者」とする GBYT の書きぶりに、疑義を呈するにとどめたい。

(44) 『元史』巻 133, 葉仙鼐伝 [中華書局点校本: 3227]。

(45) チベットにおける三宣慰使の設置時期については、陳得芝 1984 は『元史』巻 133 葉仙鼐伝に見える葉仙鼐が土蕃宣慰使となった記事を引き、その任命を至元初年と推測する [陳得芝 1984: 101]。なお、この土蕃宣慰使を陳得芝はドメー宣慰使と考えている。またドカム宣慰使の設置年代は不明とする。ウー=ツァン宣慰使については、チベットの内乱であるクンガー=サンポの乱にともなって設置されたと考え、設置時期を 1279 年～1281 年あたりとする [陳得芝 1984: 109]。一方、陳慶英は、ドメー宣慰使の設置時期については陳得芝と考え方は同じであるが、葉仙鼐が土蕃宣慰使となったことについて、この宣慰使は当時チベット唯一のものであり、チベット地区全体を管轄したと解釈した [陳慶英 1997: 331-332]。また、『元史』巻 29, 泰定帝本紀 1, 泰定 2 (1325) 年正月戊申の条に「乞剌失思八班藏トを以て土蕃等路宣慰使都元帥と為し、長河西・奔不兒亦思剛・察沙加兒・朶甘思・朶思麻等管軍達魯花赤を兼管せしめ、其の属と往きて參ト郎を鎮撫せしむ」[中華書局点校本: 653] とある記事に依り、ドカム宣慰使 (=土蕃等路宣慰使) については、設置は泰定 2 (1325) 年にまで下ると見ている [陳慶英 1997: 335]。

(46) 逆に、この三か所がドメー、ドトゥー、ウー=ツァン三箇所の中心地であったので、ダシュマンによる聖旨宣読の後、宣慰使司がこの三箇所に置かれたと考えることも可能ではある。しかし、GBYT のダシュマンの駅伝設置記事は、話として整然としすぎている印象があり、本文で述べるように、三宣慰司設置後に創作されたものと考えの方が良いように思われる。

ダシュマンの記事のみをもって、クビライ時代に、モンゴル政府によってチベットに駅伝が導入されたと結論づけるのは性急であると思われる。

次に、GBYT のダシュマンの駅伝設置記事の後に続く別の記事を検討することで、モンケ時代のチベットにおける戸口調査、駅伝設置の事実を補強してみたい。

4. イジラクとチベットの駅伝

GBYT は、ダシュマンの駅伝設置のエピソードを述べた後、やや散漫ないくつかの記事の羅列が続く。その最初が、イジラク (i ji lag ~ li ji lag: リジラクとも写されているが、以下イジラクとして表記)⁽⁴⁷⁾という人物が関わる記述である。文意が判然としない所もあるが、以下に試訳を挙げる [GBYT₁: 276-277; GBYT₂: 141; GBYT 中文訳: 151]。

【GBYT②】

チベットの諸駅伝 ('ja' mo) が新たに建てられたので、「安定させる者を一人任命してほしい⁽⁴⁸⁾」と求めたので、大臣 (mi chen) のイジラク (i ji lag) という者に、チベットの駅伝 ('jams) を掌握する聖旨 ('ja' sa)⁽⁴⁹⁾と同知 (thong ji)⁽⁵⁰⁾の位を与えて、チベット (yar) に派遣した。それから (チベットの駅伝を) 掌握して、モンゴル・サキヤ派の施主・帰依

(47) この人名の解釈については、先行研究において、いくつかの考えが提示されている。まず漢字音の類似から、これを漢文史料にみえる葉仙鼐に比定する説があるが [陳慶英 1997: 331; 尹 1998: 103; 張雲 2003: 283], 葉仙鼐のパクバ字音は ye-šen-nay であり、テュルク人名 Āsānā (< Āsān ~ Mong. Ešen) と再構できることを松井太氏にご教示いただいた。そうすると、チベット文字表記とは整合しないのは明らかである。むしろペテックが提案する、『永樂大典』巻 19417 所収『経世大典』站赤 2、至元 7 年 9 月 28 日に見える、雲南の駅伝を設置するために派遣された使臣である「亦只里」の方が良さそうである [Peteck 1990: 62]。なお、同名異人で亦只里 ~ 也只烈と漢字音写されるカチウン家の人物は、エジル (Ejil) であり [杉山 1982: 103], 問題のチベット語人名の末尾の -lag との不一致は気になる。ペテックは『永樂大典』中の亦只里を I-Ch'ih-li (Ičilig) と表記するので、原音を Ičilig と考えているのだろう。なお張雲は、ペテックのこの研究を注で指示しながら、一方でイジラクと葉仙鼐が同一人物であるとも述べており、論理がよくわからなくなっている [張雲 2003: 283, n. 3]。Peteck 1990 の中文訳は、やはり張雲が出版しているが、そこではペテックが原書で I-Ch'ih-li (Ičilig) と書いている所を「葉仙鼐 (Ičilig)」と訳してしまっており、ペテックが『永樂大典』から見つけてきた「亦只里」という形式の人名を無視している [伯戴克 2010: 61]。なお Ičilig は、テュルク語で「内に属する (→内廷/宮廷の)」と解釈できること [Wilkens 2021: 294], チベット語末尾の -lag は母音記号 (i: gi gu) の書き忘れの可能性があるので、松井太氏にアドバイスをいただいた。妥当な解釈であり、筆者も同意するとともに、ご教示に感謝申し上げたい。

また、この人名はウギェンパ=リンチェンパル (u ryan pa rin chen dpal, 1230-1309) の伝記 (u rgyan pa'i rnam thar byin rlabs kyi chu rgyun) に見えることが孫鵬浩によって指摘されており、その原音についての先行研究の整理がなされている [孫 2025: 8, n. 1]。

(48) GBYT₁には「任命する」にあたる bsko が無いが、GBYT₂に依り、補って解釈した。

(49) GBYT₁は 'ja' pa とするが、GBYT₂に依り 'ja' sa を採用する。

(50) thong ji について、Szerb 1980b: 271, n. 35 は、ji をモンゴル語・テュルク語の「～する人」を意味する語尾 -či に対応すると考えるが、thong は解決できていない。中国の研究者たちは洛桑群覚・陳 1984: 70 以来、「同知」と訳している [GBYT 中文訳: 151 など]。同知は、さまざまな官衙におけるナンバーツウの地位として見えるが、彼がどこの官衙の所属かは不明。

処の関係の中に、チベットの27駅は平安に保たれたので、ラマやブンチェン⁽⁵¹⁾、そしてモンゴルやチベットの金字使者たちは、いらっしやる道が平易で、チベットのすべての⁽⁵²⁾人々が喜ぶようになった、云々⁽⁵³⁾。これは、セチェン皇帝 (se chen rgyal po / クビライ) によって、サキヤに金字使者が派遣される前のことではあるが、仏法とサキヤ派を篤く信仰するある善良な長官⁽⁵⁴⁾が現れたので、いくばくかの伝記を書いたのである⁽⁵⁵⁾。

同知イジラク (li ji lag (sic) < i ji lag) がチベットの駅伝に到達する前に、モンゴルの皇帝 (hor rgyal po) により、雲南 (ljang yul) に最初の軍がいらっしやった時、ドメーの2つの駅が、中国 (rgya) の駅との連結において、中国 (mar) へ集め⁽⁵⁶⁾、しだいに効果をあげて、ドトゥーのガレ (ga re)・ゴペ (go dpe) の2つの駅が⁽⁵⁷⁾、ウー=ツァンに⁽⁵⁸⁾恩恵を大きく現すことになったのである。

この【GBYT②】と、ダシュマンが出てくる【GBYT①】とは、話の上で何らかの断絶があることは、文脈からも理解できるだろう。【GBYT②】は、【GBYT①】とは別の情報源に基づく記述であると思われる。

ここでは、イジラクが駅伝管理者としてチベットに派遣される話が最初に述べられる。この部分では、ダシュマンの名はもう現れておらず、「チベットの駅伝の最初の設置者としてのダシュマン」は言及されていないことになる。そして、チベット27駅が安定したこと、その結果ラマやブンチェン、チベット・モンゴルの使者の往来が滞りなく行われるようになったこと、最後にそれがチベットの人々の利益となったことが述べられ、これらがイジラクの事績として書かれたことが述べられる。問題は、イジラクがいつの人か、という点であるが、これらのイジラクの事績が「クビライによって、サキヤに金字使者が派遣される前のこと」とされているのは重要だろう。現段階で知られている史料に依る限り、クビライとサキヤ派が具体的に関係を持ったのは、パク

(51) ブンチェンは、ここではサキヤの行政長官を指す [山本2018]。

(52) GBYT₁は bying po 「迷う、愚昧である」とするが、GBYT₂の byings po 「全ての」を採る。

(53) skad 「云々」で一度文章は切れている。

(54) mi dpon はここでは「長官」と訳した。人 (mi) と官員 (dpon) からなる語である。

(55) ここで「いくばくかの伝記を書いたのである」と述べている人物は、GBYT 著者のペンジョル=サンポであろう。また、誰の伝記かといえば、文脈上、イジラクの伝記と理解できる。

(56) mar 「下」は、yar 「上」に対応する言葉。yar はチベットを指すことが多く、ここで mar は中国方面と理解できる。解釈しがたいのは bsdus pa 「集めた (sdud pa の完了形)」である。「チベットと中国の駅が束となって」という方向で理解できるかと思われる。

(57) 先にドメーの2駅が雲南遠征に活躍したといい、ドトゥーのガレ・ゴペの2駅が中央チベットのウー=ツァンに益したというのは、そのままでは理解しがたい。何らかの省略を想定するべきかもしれない。ガレ (ga re)・ゴペ (go dpe) 駅は、GBYTの駅名リストにも登場する重要な駅である [山本2009: 7, 表中No. 14, 15]。Peteck 1990: 62 ではこの2駅は、『元史』巻17、世祖本紀14、至元29 (1292) 年12月壬子の条で、「中書省に敕し烏思蔵の站の例を用て、合里・忽必の二站到馬牛羊を給うこと、凡そ銀九千五百兩為り」[中華書局点校本: 369]と見える「合里・忽必」の2駅と判断する。

(58) GBYT₂は、ここに比較的長い文章を挿入しているが、意味のある文章ではないので、言及・検討は割愛する。

パとクビライの最初の会見が六盤山で実現した 1253 年のことである [中村 1997: 130–131]。そして、クビライがサキヤ派とより結びつきを強めるのは、クビライの 1260 年の即位以降と考えるのが穏当であろう。つまり、このイジラクの活動は、モンケ時代以降、クビライ統治期初期のものと判断できる⁽⁵⁹⁾。

【GBYT②】で、より注目すべきは、イジラクがチベットの駅伝に派遣される前のこととして、「モンゴルの皇帝 (hor rgyal po)」による雲南遠征の記事が見える点である。これをセルブはモンケ時代の 1253 年から始まる、クビライによる雲南遠征であると考えている [Szerb 1980b: 272]。GBYT のチベット語テキストを利用できる今、遠征の主体が「セチェン皇帝 (se chen rgyal po)」すなわちクビライではなく、あえて「モンゴルの皇帝 (hor rgyal po)」と書かれている点にも注目すべきであろう⁽⁶⁰⁾。これは、やはりセルブの言うように、モンケ時代の雲南遠征について述べるものと判断できる。

また、この雲南遠征の話題においては、チベットのドメーやドトゥーの駅伝が言及されている。特にドトゥーについては、ガレ駅とゴペ駅という、他の史料からも存在が確認できる駅伝名が言及されている。以上のことから、モンケ時代の 1253 年の雲南遠征時に、すでにチベットには駅伝が設置されていた、と結論づけることができる。つまりこの【GBYT②】からは、チベットの駅伝の設置→雲南遠征→イジラクの派遣、という流れを読み取ることができるのである。また、繰り返しになるが、駅伝の設置は、駅伝の維持管理体制が土台にあるものであり、駅伝の設置以前に、戸口調査が実施されていることが想定される。

このような理路をたどることで、ようやくセルブと川本が言うように、モンケ時代にチベットにおいて戸口調査が実施され、それに基づく駅伝管理体制が構築され、チベットに駅伝が設置されることになった、と考えることができるのである⁽⁶¹⁾。本稿の結論は、モンゴル時代におけるチ

(59) もちろん、「クビライによってサキヤに金字使者が送られる」ということが、クビライ時代が始まってかなり経ってからのことであれば、イジラクの活動はモンケ時代のものではなく、クビライ時代のことということになる。それゆえ、この部分からは、イジラクのチベット派遣が必ずモンケ時代のことである、とは断言できない。

(60) モンケの名前を出さず、「モンゴルの皇帝」としているのは、何も GBYT の著者がモンケの名を知らなかったからではあるまい。GBYT は徹底してカギュー派の系統であるカルマ派について無視し続けているが、このカルマ派こそ、モンケとの関係が深いセクトである [山本 2021b: 59–61]。前掲注 25 でも示した通り、GBYT の著者ペルジョル=サンポはサキヤ派に連なる人物であり、カルマ派やモンケに関わることを、あえて記述しない方針を採っていた可能性がある。この点は、GBYT という史料全体に関わる問題であり、改めて検討したい課題の一つである。

(61) 川本 2000: 52, n. 50 は、ペテックの研究を引きつつ、チベットの戸口調査を 1268 年とするペテックの議論を批判する。GBYT は本稿で示した【GBYT②】以外は、チベットの駅伝設置や戸口調査をクビライ期のこととする文脈で大部分が書かれているので、その文脈に則って研究を進めた Petech 1980 が、チベットの戸口調査を 1268 年のこととするのは理解できないことではない。ペテックが、チベットにおける戸口調査を 1268 年のこととしていることに対し、川本は「初めての戸口調査において使者に与えた大ハーンの言葉（彼が見た『漢藏史集』のテキストには抜けていたのであろうか）にまったく言及していないことから（山本注：ペテックの見解が誤りであることは）明らかである。」とも述べるが、これはダシュマンに対してクビライが話した言葉を取り上げているのであろう。もちろん、GBYT の文脈上、これがモンケ期の記事でないことは、

ベットへの駅伝システムの導入は、モンケ時代の出来事であり、それも戸口調査実施が予告される記事がバクパの手紙に見える 1252 年 2 月以降、クビライが雲南遠征に向かう 1253 年 8 月ごろまでの間⁽⁶²⁾と考えられる、ということである。

おわりに

以上、検討してきた通り、モンゴル政権がチベットにおいて初めて戸口調査をおこなったのはモンケ時代の 1252 年 2 月以降、1253 年 8 月以前であると考えるのが、現段階では妥当である。そして、この戸口調査に基づき、駅伝の維持管理義務が、チベットの諸氏族集団に割り当てられ、チベットに駅伝制度が導入されたものと考えられる。1253 年 8 月以降の、クビライによる雲南遠征において、チベットの駅伝が有用であった、と述べる GBYT の記事が、この考えの根拠となる。

この論証の基礎は、セルブの研究にある。では、セルブの研究においては分封の検討が不足しているとした、陳慶英・史為民の指摘にはどのように応えられるだろうか。これについては、山本 2021b: 56–57 で提示した、14 世紀のバクモドゥパのティプン (khri dpon/万戸長) チャンチュプ=ギェルツェンの自伝にある、次の記事がヒントになるだろう [RP: 110; RP 中文訳: 75]。

その当時、チベット方面は涼州の王子コデンが管轄していて、コデン=アカ (go dan a ka < Mong. köden aqa) は帰依処となる僧侶を (チベットから) 取っていたが、(モンケが即位すると) ディクン派はモンケ皇帝 (mon 'gor rgyal po) が掌握し、ツェル派はセチェン皇帝 (se chen rgyal po/クビライ) が掌握し、バクモドゥ派は王子フレグ (rgyal bu hu la hu) が掌握し、タクルン派はアリク=ブケ (a ri bho kha) が掌握することとなった。四つの王室が、それぞれのティコルにおいて、特別に所有することとなったのである。

おそらく、モンケによる戸口調査の後、モンケの兄弟の間で、チベットの分封が行われたのであろう。そして、山本 2021b: 57 でも推測したが、モンケ・クビライ・フレグ・アリク=ブケは、それぞれディクン派・ツェル派・バクモドゥ派・タクルン派から、独占的に僧侶を招請する権利を得たものと思われる。各王族に権益が設定された、という点では、漢地における分地分民と軌を一にする政策と言えるだろうが、土地や民戸や税収が具体的に各王族に分割されたのではないだろう。

ところで、モンケ期の戸口調査については、チベットで編纂された仏教史類 (chos 'byung/チュンジュン) に、関連する記事は管見の限り見当たらない。特に、モンゴル時代の詳細な記事が多数掲載されている GBYT には、クビライ時代の戸口調査の記事はすぐに見出せるが、モンケ期の

上述の通りであり、例えば GBYT の中文訳を見ても、それは理解できるところだと思われる。

⁽⁶²⁾ クビライは 1252 年 6 月にモンケから雲南遠征を命じられ、1253 年 4 月には六盤山に至っている。そして 8 月に臨洮を経て南下し、10 月に金沙江に達している。12 月ごろには大理を占領し、後事をウリヤンカダイに委ね、1254 年早々に往路を経て、六盤山に戻った [松田 1980: 252–253]。この進軍ルートのうち、臨洮あたりから南下する際、チベット人の居住エリアを通ることになると思われる。GBYT は「雲南に最初の軍がいらっしやった時に」、ドメーとドトゥーの駅があったことを述べるので、1253 年 8 月～10 月ごろには、チベットに駅伝ができていたと考えるのが妥当だろう。

出来事については、ほとんど記述がない。本稿で検討したイジラクに関連する記事においても、モンケの名を直接出さず、「モンゴルの皇帝 (hor rgyal po)」のようにモンケを表現している。これは、なぜなのであろうか。クビライ時代に、モンケやグユクの時代の歴史が、記録から抹消されていったからではなかろうか。近年、クビライの即位は非合法なものであつて、クビライはその否定的評価の払拭に努めた、という見方が提示されているが [松田 2023: 105, 138, 169, n. 30], だからこそ、クビライ政権は自身の正当化のため、前時代を否定したり、その記録を糊塗していった可能性がある。クビライと密接に結びついたサキャ派は、この路線を肯定したであろうし、その態度は GBYT にも反映しているように思われる [cf. 山本 2017: 118]。もちろんこれは、より多くの事例を積み重ねて検討するべき課題だが、本稿の検討からも、そういったクビライ時代の「作為」がうかがわれるのである。

略号・参考文献 (ABC 順) [引用は再録ページ数に依る]

- Allsen, T. T. 1987: *Mongol Imperialism*, University of California Press.
- 伯戴克 2010: (張雲・訳)『中部西藏与蒙古人：元代西藏歴史 (増訂本)』蘭州大学出版社。
- 蔡巴貢嘎多吉 1981: (東嘎洛桑赤列・校注)『紅史』民族出版社。
- 蔡巴貢嘎多吉 1988: (東嘎洛桑赤列・校注, 陳慶英・周潤年・訳)『紅史』西藏人民出版社。
- 蔡志純 1984: 「元代吐蕃駅伝略述」『西藏研究』1984-4, pp. 52–56.
- 陳得芝 1984: 「元代烏思藏宣慰司的設置年代」『元史及北方民族史研究集刊』8. (再録: 陳得芝 2005, pp. 101–112)
- 陳得芝 2005: 『蒙元史研究叢稿』人民出版社。
- 陳慶英 1997: 「元代朵思麻宣慰司的設置年代和名称」『中国藏学』1997-3. (再録: 陳慶英 2006, pp. 327–336) .
- 陳慶英 2006: 『陳慶英藏学論文集』中国藏学出版社。
- 陳慶英・史為民 1985: 「蒙哥汗時期的蒙藏關係」『蒙古史研究』1, pp. 3–10.
- 達倉宗班覺桑布 1999: (陳慶英・訳)『漢藏史集』西藏人民出版社. (初版: 1986)
- Das, S. C. 1907: “Tibet under Tatar Emperors of China in the 13th Century A.D.” *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 73-1 (Extra No.-1904), pp. 94–102.
- 大司徒絳曲堅贊 1986: (恰白次旦平措・主編)『朗氏家族』西藏人民出版社。
- 大司徒絳求堅贊 1989: (贊拉阿旺・余万治・訳, 陳慶英・校)『朗氏家族史』西藏人民出版社。
- DM = *Deb ther dmar po*. [蔡巴貢嘎多吉 1981 (中文訳: 蔡巴貢嘎多吉 1988; 和訳: 稲葉・佐藤 1964)] .
- dpal 'byor bzang po 1985: 『漢藏史集』四川民族出版社。
- 藤原崇人 2005: 「元代華北における僧官の設置形態」『内陸アジア史研究』20, pp. 23–43.
- 福田洋一・石濱裕美子 1986: 『トゥカン』『一切宗義』モンゴルの章 (西藏仏教宗義研究 4) 東洋文庫。
- 船田善之 2005: 「元代の命令文書の開読について」『東洋史研究』63-4, pp. 36–67.
- GBYT = *rgya bod yig tshang*. [GBYT₁; GBYT₂] .
- GBYT₁ = *rgya bod kyi yig tshang mkhas pa dga' byed chen mo 'dzam gling gsal ba'i me long*. [dpal 'byor bzang po 1985 (中文訳: 達倉宗班覺桑布 1999)] .
- GBYT₂ = *rgyal rabs mang po'i legs bshed rnam grangs yid 'dzin nor bu'i phreng ba bzhugs*. [stag tshang dpal 'byor bzang po 2007] .
- 稲葉正就・佐藤長 1964: 『フウラン・テプテル: チベット年代記』法蔵館。
- 川本正知 2000: 「中央アジアのテュメンなる地域区分について」『西南アジア研究』53, pp. 24–60.
- 川本正知 2013: 『モンゴル帝国の軍隊と戦争』山川出版社。
- Laufer, B. 1916: “Loan-Words in Tibetan.” *T'oung-pao* 17, pp. 403–552.
- 洛桑群覺・陳慶英 1984: 「元朝在藏族地区設置的駅伝」『西北史地』1984-1, pp. 66–75, 13.
- 松田孝一 1980: 「雲南行省の成立」『立命館文学』418–421, pp. 251–272.

- 松田孝一 2023: 「チンギス・カンをめざした「賢き皇帝（セチェン・カアン）」『モンゴル帝国のユーラシア統一 [12～14世紀]』(アジア人物史 5) 集英社, pp. 81–175.
- 松井太 2020: 「批評：宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』を読む（二）」『内陸アジア言語の研究』35, pp. 53–111.
- 中村淳 1993: 「元代法旨に見える歴代帝師の居所：大都の花園大寺と大護国仁王寺」『待兼山論叢』27（史学篇），pp. 57–82.
- 中村淳 1997: 「チベットとモンゴルの邂逅：遙かなる後世へのめばえ」『中央ユーラシアの統合』（岩波講座世界歴史 11）岩波書店, pp. 121–146.
- 中村淳 2010: 「モンゴル時代におけるバクバの諸相：大朝国師から大元帝師へ」『駒澤大学文学部研究紀要』68, pp. 35–69.
- 中村淳・松川節 1993: 「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 1–92, +8 pls.
- 西田龍雄 1970: 『西番館訳語の研究』松香堂.
- 龐琳 1999: 「元代入藏駅道考述」『西藏研究』1999-4, pp. 48–53.
- Pelliot, P. 1930: “Sur yam ou jam, «relais postal».” *T'oung-pao* 27, pp. 192–195.
- Petech, L. 1980: “The Mongol Census in Tibet.” M. V. Aris and Aung San Suu Kyi eds., *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar of Tibetan Studies, Oxford 1979*, Aris & Phillips, pp. 233–238.
- Petech, L. 1983: “Tibetan Relations with Sung China and with the Mongols.” M. Rossabi ed., *China among Equals: The Middle Kingdom and Its Neighbors, 10th–14th Centuries*, University of California Press, pp. 173–203.
- Petech, L. 1990: *Central Tibet and the Mongols*. Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- RP: *rlangs po ti bse ru*. [大司徒絳曲堅贊 1986（中文訳：大司徒絳求堅贊 1989）].
- 『サキヤ全書』= *sa skya pa'i bka' 'bum: The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism*, 7 vols., Toyo Bunko, 1968.
- 佐藤長 1986: 『中世チベット史研究』同朋舎.
- stag tshang dpal 'byor bzang po 2007: (百慈蔵文古籍研究室・編輯整理) *rgyal rabs mang po'i legs bshed rnam grangs yid 'dzin nor bu'i phreng ba bzhugs*, 中国蔵学出版社.
- 杉山正明 1982: 「クビライ政権と東方三王家」『東方学報（京都）』54.（再録：杉山 2004: 62–126）
- 杉山正明 2004: 『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会.
- 孫鵬浩 2025: 「從《口述伝記》看元代中央政府对西藏的治理」『歴史研究』2025-2, pp. 4–27.
- Szerb, J. 1980a: “Glosses on the Oeuvre of Bla-ma 'Phags-pa. I: On the Activity of Sa-skya Paṇḍita.” M. V. Aris & Aung San Suu Kyi eds., *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar of Tibetan Studies, Oxford 1979*, Aris & Phillips, pp. 290–300.
- Szerb, J. 1980b: “Glosses on the Oeuvre of Bla-ma 'Phags-pa. II. Some Notes on the Events of the Years 1251–1254.” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 34, pp. 263–285.
- Tucci, G. 1949: *Tibetan Painted Scrolls*, 3 vols. La Libreria dello Stato (Rpt. Rinsen, 1980, 2 vols).
- 牛根靖裕・古松崇志・松川節・小野浩・齊藤茂雄・高井龍・伴真一朗・毛利英介 2021: 「コズロフ蒐集ハラホト出土モンゴル語印刷文献断簡 G110r について：『大元通制』ウイグル字モンゴル語訳の発見」『日本モンゴル学会紀要』51, pp. 41–63.
- Wilkens, J. 2021: *Handwörterbuch des Altuigurischen*, Universitätsverlag Göttingen.
- Wylie, T. V. 1977: “The First Mongol Conquest of Tibet Reinterpreted.” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 37-1, pp. 103–133.
- Yamaguchi, Z. (ed.) 1970: *Catalogue of the Toyo Bunko Collection of Tibetan Works on History*. Toyo Bunko.
- 山本明志 2009: 「チベットにおけるジャムチの設置」『日本西藏学会会報』55, pp. 3–13.
- 山本明志 2010: 「元代藏漢交通の駅路路線と臨洮」『成吉思汗与六盤山國際學術檢討會論文集』甘肅人民出版社, pp. 386–393.
- 山本明志 2017: 「モンケの聖旨をめぐって：『屠殺、狩獵、及び刑罰を禁じる日』」『元典章が語ること：元代法令集の諸相』大阪大学出版会, pp. 117–142.
- 山本明志 2018: 「モンゴル時代のチベットにおける都元帥」岩尾一史・池田巧編『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』京都大学人文科学研究所.

- 山本明志 2021a: 「「サキヤパ時代」から「バクモドウパ時代へ」：チベット語典籍史料における記述の変遷をめぐって」『東洋史研究』79-4, pp. 1–34.
- 山本明志 2021b: 「モンゴル政権・明朝中国との接触とチベット社会の変容」岩尾一史・池田巧編『チベットの歴史と社会：上〔歴史篇・宗教篇〕』臨川書店, pp. 54–73.
- 山本明志 2021c: 「ジャムチを使う人たち：元朝交通制度の一断面」『元朝の歴史』（アジア遊学 256）勉誠出版, pp. 31–44.
- 楊志玖 1983: 「元代の幾個答失蛮」『内蒙古社会科学』1983-4.（再録：楊 1985, pp. 211–225）
- 楊志玖 1985: 『元史三論』人民出版社.
- 亦隣真 1982: 「元代硬訳公牘文体」『元史論叢』1, pp. 164–178.
- 尹偉先 1998: 「維吾爾族出身的吐蕃宣慰使葉仙鼐史事考述」『蘭州大学学报（社会科学版）』26-2, pp. 101–108.
- 張曉非 2023: 「元貞初年元朝經略西藏探析」『中国藏学』2023-3, pp. 73–82.
- 張雲 1993: 「答失蛮其人及其經略吐蕃考実」『中国边疆史地研究』1993-4.（再録：張雲 1998, pp. 281–289）
- 張雲 1998: 『元代吐蕃地方行政体制研究』中国社会科学院出版社.
- 張雲 2003: 『元朝中央政府治藏制度研究』黒龍江教育出版社.
- 祝啓源・陳慶英 1985: 「元代西藏地方駅站考釈」『西藏民族学院学报』1985-3, pp. 26–38.